

医師の英雄性とその困難

——支援とナラティブの社会学（3）——

早稲田大学 鷹田佳典

1 目的

健康と病いをめぐって、これまで支配的な地位にあったのが「回復の語り」であるが、社会学者のA・フランクが指摘するように、この「回復の語り」の背景には医療がひかえている。患者に回復をもたらす（ことが期待されている）のは医療だからである。そして、こうした医療の「能動的な英雄性」を体現するのが医師である。医師は「行為する英雄」であり、あらゆる医療手段を駆使して患者の回復を目指す。だが、医療が高度に発達した現代社会においても、治療が困難な病気は数多く存在する。では、治らない病いを抱えた患者や死を間近に控えた患者を前にしたとき、医師はどのような医療を実践するのか。また、それらと結びついた物語はどのようなものであるのか。本報告では、ある小児科医の語りをもとに、これらの問いについて検討を行う。

2 方法

本報告では、筆者が2013年から継続して取り組んでいる小児科医への聞き取り調査で得られたデータの一部を用いる。この調査は、患者の死を医師はどのように受け止めているのか、という問題関心に導かれて企画されたものであり、これまで22名の小児科医を対象に、半構造化面接法を用いた聞き取りを実施してきた。本報告では、そのなかから、上記のテーマについて示唆的な語りが得られた一事例（M医師のケース）を取り上げ、分析を行う。

3 結果

M医師は20年以上にわたって小児科医として勤務経験を持つ医師であるが、多くの患者の死に接するなかで、できることを全てやるという医療（＝やり尽くす医療）に違和感を抱き、できることがあっても、場合によっては「やらない」という選択も認めるような医療のあり方を模索してきた。しかし、医療現場においては、できることがあるのにやらないことへの抵抗感が非常に強く、なかなか周囲のスタッフから理解を得られなかった。従来の「やり尽くす医療」について問い直しを続けるなかで、「精一杯尽くす医療」の重要性を認識するに至る。

4 結論

「やり尽くす医療」とは、回復が見込めない状況にあっても、できることが限られていることを認めず、R・ザスマンのいう「積極行動主義（activism）」の原則にしたがって、治療を継続しようとするものである。そのなかで医師は、文字通り「行為する英雄」として振る舞うことができるし（たとえ患者の死という結果を迎えるとしても、「できることは全てやった」という納得を得ることができる）、遺族からの訴訟リスクも低減ができる。これに対し「精一杯尽くす医療」は、残された手段が限られているという前提に立ち、そのなかで患者やその家族に可能な限り寄り添おうとするものである。小児領域にも緩和医療の視点が導入されつつある現在、こうした医療のあり方（物語）に対する理解は少しずつ広がりを見せてはいるものの、「やり尽くす医療」と強い親和性を持つ「回復の語り」は依然として頑健性を有しており、「行為する英雄」たらんとすることから距離を取ろうとする医師たちがある種の弱さを抱えることになっている。